〔藩翰譜十二古田〕織部正藤原重勝は、豐臣太閤の御家人たり、重勝又は重能とも重然とも記せり、○中略若き時より茶の事を好きて、千利休居士が門弟にして、此事を好きし人々は重勝を以て一世の宗とす、

此程は此事の師範する人をば和尚と稱す、この人利休が高弟にて時の和尚にてありけり、○中略

同○元和元年　六月十一日、織部正重勝、其男山城守某、父子二人切腹、其餘黨悉く誅せられてけり、

織部正は、古き玩器の全きをば、餘りに思ふ所なしとて好まず、されば書畫やうの物をも、かしこを切り、こゝを斷ち、凡の茶具をも多くは損ひ毀りて、又補ひ綴りてぞ用ゐける、世の人皆興ある事に思ひ學びて、世に全き者のなからんとす、松平伊豆守信綱の實父大河内金兵衛久綱、常にかたへの人に言ひしは、必禍ひに罹りて死すべき者なりといひき、其後この人罪蒙りて誅せられしかば、人々大に驚き、如何で兼てより斯くは相知れるぞと久綱に問ふに、古の寶器と聞えしも、世々の亂に失せて、今ある所の物は、皆神佛の護持してこそかく世には殘るらめ、それにおのれ一人の所存に隨ひて損ひ破ること、必鬼神の憎む所にやあるべき、さらば其人も又身を全くして終る事を得べからずと思ひきと言ひしとなり、さる名言たるよしふるき人の物語りを承りき、此事萬にわたり心得あるべき事にや、

〔慶長日記〕慶長十五年九月、此比古田織部茶ノ湯數奇者ノ隨一也駿府江戸へ下り、師ト而將軍家數奇仕給間、上下馳走ト云々、會每膳部ニカハラケヲ用ユ、

〔駿府政事錄〕慶長十七年八月十四日、朝召二乘院一賜二御茶一、日野入道、金地院、藤堂和泉守爲二相伴一、折節古田織部介重然下着、仍今朝立二御茶一、織部者當時數奇之宗匠也、幕下甚崇二敬之一給、諸侍志二茶湯一輩、朝于晩有二茶湯一、